



Title	接語形代名詞の位置に関する統語的考察：スペイン語主語後置と接語形代名詞移動の関連について
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 1975, 33, p. 65-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80541
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

接語形代名詞の位置に関する統語的考察*

(スペイン語主語後置と接語形代名詞移動の関連について)

出 口 厚 実

Observaciones sintácticas sobre la colocación de los pronombres clíticos españoles

por Atsumi DEGUCHI

En el español actual el pronombre clítico se pospone obligatoriamente al verbo en infinitivo o gerundio. El pronombre átono va detrás del imperativo o del presente de subjuntivo usado como imperativo cuando éstos son afirmativos. Con las demás formas verbales, los pronombres suelen ser proclíticos.

¿Por qué el infinitivo, el gerundio y las formas verbales usadas como imperativo tienen el mismo comportamiento sintáctico con respecto a la posición del pronombre? El presente artículo tiene por objeto estudiar esta posposición de los pronombres personales átonos desde el punto de vista transformacional. Lo que sacamos en conclusión es que el carácter enclítico o proclítico del pronombre se determina por una transformación que pospone al verbo cualquier elemento nominal que principien una oración involucrada.

0) スペイン語の目的格人称代名詞接語形 Clitic pronoun (以下 Cl-pro と略す) が文中に占め得る位置は限られていて、動詞に関連して相対的に位置づけられる。通常、定形動詞の目的語となる人称代名詞は(1)(2)のように後接語形として動詞の直前に先行するか、(3)の例文に見られ

(1) Lo hago.

(2) No lo hagas.

(3) Hazlo.

るとおり前接語形態をとる。これらはいずれも義務的に要求される位置であり、現代口語では(1)~(3)の各文において lo が上記以外の場所に出現することは許されない。不定詞または現在分詞を含む文(4)(5)ではそれぞれ a. b. の両文が成立し両者に意味の差異はない。即ち、代名詞の現

(4) a. Puedo hacerlo.

* 本稿は1972年11月11日、駒沢大学で行なわれた第18回日本イスパニア語学会において筆者が『人称代名詞配置・移動規則に関する考察』と題して口頭発表したものの一部に、加筆修正をほどこしたものである。

- b. Lo puedo hacer.
- (5) a. Estoy haciéndolo.
- b. Lo estoy haciendo.

われる位置はそれを支配する不定形の直後位と、その不定形の上位にある文の定動詞の直前位とのほぼ完全な自由変異を示す。

(1)~(5)における Cl-pro の位置を説明するためには、Perlmutter (1971) の指摘する^{注1}とおり、少なくとも2種類の接語形代名詞配置規則が必要だと思われる。一つは(1)~(3), (4a), (5a)に見られる lo のように代名詞をそれが属す文の動詞へ接語化する規則である。他は(4b)(5b)の例文の如く、一定の条件下で接語代名詞を上位文の動詞へ上昇させる派生後期の任意的な規則である。Rivero (1970 : pp. 642-643, 1971 : pp. 96-97) の主張によると、後者の Cl-pro 移動の条件は S-node の有無と関係がある。彼女は、接語代名詞を含む下位文に Equi-NP Deletion が適用された結果、S-Pruning Convention^{注2}により S-node を失い上位文と単一の S 内に包含される時に Cl-pro の上昇が可能だと考える。この分析に立てば、接語形代名詞を上位文の動詞へ移動させるのは、‘不定詞’、‘現在分詞’形などの動詞の形態的特徴ではなく、統語的な条件によるとみることができる。

一方、(1)~(3), (4a)(5a)各文の lo の位置に関して、従来の文法は代名詞と共に起する動詞の形態が代名詞の前接後接を決定すると述べるのが普通である。肯定命令形を除き定動詞に対しては Cl-pro は動詞前位をとり、不定詞・現在分詞、命令法及び命令に用いられた肯定接続法形の動詞に対しては、その直後の位置に來ると規定される^{注3}。本稿は現代西語における以上のような Cl-pro の基本的位置が動詞屈折形態に言及することなく、代名詞を含む文の統語的構造によって決定されると考え^{注4}、Cl-pro 配置の過程を解明することを目的とする。もしこれが正しければ、Rivero の移動条件の考察と相まって代名詞シンタクシスに係わる全般的特徴の一つを把握することになる。尚、小論は目的格人称代名詞の配置が主語人称代名詞のそれと密接な関係をもち、両者の共通点を西語代名詞の重要な特色として捉えるべきだという見解(出口 : 1972b, 同 1973)の延長線上にあるが、これを前提にしなくても、また代名詞の起源に関して種々の異説に立つ場合でも、本質的に同じ趣旨の主張が可能だと信じている。

I) 西語目的格代名詞の *sintaxis* の中で重複代名詞構文の存在が重要な意味をもつことは拙稿(1972a)で指摘した。そこで筆者は Cl-pro が基底にある代名詞あるいは代名詞化された要素そのものの表層への現われではなく、これを基に転写規則 Copying rule によって写し出された代名詞であるという考えを示した。例えば文(6)は、表面的には接語形代名詞 *le* のみを含む。しかし、

- (6) Le espero.

その展開の途中に(7)(8)の如き代名詞が二重に現われる派生構造^{注5}が存在するものと仮定した。le

- (7) espero-le (a) él

(8) le espero (a) él

と(a) él の referent は同一であるから、更に深い構造では、これらは一つの構成素であった筈で、le を(a) él から複写して作り出す変形規則の必要性を認めた。(a) él は、通常、後期の削除規則の働きで姿を消すが、時にこの代名詞が焦点化されたり対比的に使用されると削除されずに残り、表面構造に現われることもある [(9)(10)]。しかし非人間性名詞の目的語に対しては

(9) Le espero a él.

(10) Le di un libro a él.

(9)(10)のタイプの重複代名詞構文は普通起こらない。即ち元の代名詞 P は概ね次の条件下で削

(11) 1. P が [-human] のとき

2. P は [+human] だが、強意又は対比のいずれの特徴も持たないとき

除されると考えられる。このように仮定された Cl-pro 形成のプロセス(12)は(9)(10)等の強意

(12) a. V P ここで V は動詞を表わす

b. V-P' P 代名詞転写 (義務的)

c. V-P' 代名詞削除 (条件(11))

構文を自然に説明する。Postal (1966) の提案する代名詞化(及び定冠詞化)変形にも見られるが、Copying は変形規則としてありふれた形式の一つであり、特別な justification を要求する操作でない点を付記しておく。

II) (4a)(5a)(13)で Cl-pro の lo, le は動詞の後に接合する。拙論 (1972a) で、P' は(12)の

(13) a. No quiero hacerlo.

b. Hacerlo él sería imposible.

c. Espérale.

d. Espérele usted.

図式の如く P の左側に転写されて動詞の右に接語化されるとした。従って定形動詞の目的語となる接語形代名詞を動詞の左へ移動させる変形を仮定し、不定形や肯定命令形の場合、この前置規則に影響されず元の位置に留まると考えた。ここで、もう少し詳しくこの問題を検討し直し、どのような移動規則が簡潔で正しく代名詞配置を説明するか調べて見たい。最も重要な仕事は、西語において何が Cl-pro の位置を決定しているかを探り出すことであると思われる。(13a, b)で lo は動詞不定詞形の目的語となっている。(13c, d)では動詞は命令形である。人称代名詞目的格弱形の位置に関して不定詞と命令形動詞が同じ扱いを受けるのは偶然だろうか。勿論、無関係な二つの形式が統語論で類似した振舞を示すことはあり得ないことではない。しかし、本当に両者の間には何の共通点もないのかどうか確認する必要がある。

意味上、不定形・命令形の両形式が共有する特性が存在するとは思えない。『命令形』という表現は必ずしも意味素性〔命令〕又は同類の素性の存在と同義でない。例えば(14)の各文は〔願

- (14) a. Que me mires.
 b. Que usted lo haga.
 c. Que espere él.
 d. Que entren.

望)の場合の他, [命令] を含み得ると解釈できるが接語代名詞は動詞に先行する。又 (3) と同意の文 (15) では lo が hacer の前に位置する。従って深層構造に由来する [命令] 要素にのみ原

(3) Hazlo.

(15) Te mando que lo hagas.

因を求めることはできない。一方, 不定形に特有な一定の意味を取り出すことも難しい。音韻面で不定形と命令形が類似するわけでもない。形態論上からも一律に規定しにくい。命令法形だけでなく, (13d) の例に見られるとおり接続法形にもあてはまるし, 命令文に用られた接続法でも否定されると代名詞は先行する [(2), (16)]。ここで否定命令という場合の‘否定’も意味単位

(2) No lo hagas.

(16) No lo haga usted.

としての否定要素が動詞と関連して存在することではない。文(17)は明らかに [否定] の意味素性を含んだ文であるが Cl-pro は後置される。命令文の主動詞が否定小辞 no, ni あるいは動詞よ

(17) Niégalo.

り前に置かれた nunca, jamás など否定される時に Cl-pro は動詞の前に立つ。

意味・音韻・形態的理由に帰せないこのような現象を説明する可能性として残されるのは syntaxis の面である。表面構造に不定詞・現在分詞として現われる構造は基底において埋め込み文 embedded S であったことは明らかであり, これらの形態的指標 -r, -ndo は que と同じく complementizer の一種と考えられる。ところが (13c, d) 等の命令文は表面的には単文のようであり, 補文を導く complementizer を含まない。しかし, 命令文は, より深い構造で命令の意味を有する上位の動詞に支配された複文 Complex S であるとする見解がある。^{注7} 派生の過程で上位動詞も complementizer も削除を受けるため従属動詞を中心にした単文形式で現われるというのである。基底構造に存在して従属文の動詞形態 (命令法・接続法 etc.) を決定する動詞的構成素を querer, mandar, pedir などの実動詞とみなすか,^{注8} 具体的な音形を持たない一種の Pro-verb (Ross 1970 : p. 245) 又は抽象動詞 Abstract verb とみなすかについては見方の分かれる所であるが, 本稿は後者の立場で論を進める。いずれにせよ (13c, d) の如き命令文は元々一定の派生段階まで embedded S であったと仮定すると (14) のような願望 (命令) 文・間接命令文の存在を説明する上で都合である。即ち, (14) では主動詞は消え顕在化しないが complementizer の que はそのまま残ったと見られる。さらに (18b) のように命令表現に不定詞形が生じるのは, 主

- (18) a. Os mando venir.
 b. Venir.

c. Os mando que vengáis.

動詞 mandar 又は ordenar に準ずる抽象動詞だけが削除されて、complementizer の -r は残ったためである。命令表現において命令形の動詞が出現するか、不定詞形で示されるかの違いは complementizer 挿入の時点で que が選択されるか -r が選ばれるかによって決まると言える。実際、que と -r の選択任意性は (18a, c) のような命令動詞文だけでなく、一定の意味領域に属す実動詞を主文に含む (19) のタイプの複文に広く見られる一般的現象である。

- (19) { Dejo a María leerlo.
 { Dejo a María que lo lea.
 { Me permiten beber vino.
 { Me permiten que beba vino.
 { Les prohibo fumar en clase.
 { Les prohibo que fumen en clase.
 { El reglamento nos impide hacer eso.
 { El reglamento nos impide que hagamos eso.
 { Os aconsejo estudiar todos los días.
 { Os aconsejo que estudiéis todos los días.

それ故、(13c, d) は基底において〔命令〕の抽象動詞を含む複文であって、一度 que が導入された後、再び姿を消したと考えられる。又 (14) (18b) の存在は、命令文が導出される際、上位動詞と complementizer が同時に消去されるのではなく、削除は別々に行なわれることを暗示する。^{注11} 命令文は深層構造でも単文を示すという見方もある。例えば Hadlich (1971 : pp. 121-122) は neg や Q に似た命令要素 ^{注12} C を PS 規則で文頭に生成し、間接命令文や命令文を引き出す変形を設ける。しかし、この方式では「単文」の間接命令文に、補文を導く complementizer と同一形式の que が生じるのは単なる偶然とみななければならず、又 que で導かれる文の動詞が接続法形をとる理由をうまく説明できないし、不定形命令文の派生も困難である。

Ⅲ) これまで例示したいくつかの命令表現を対照してその Cl-pro の位置を観察すると (14) (15) のように que で先導される文ではそれらは動詞に前置され、(3) (13c, d) など que を含まない文においては、不定詞と同様、動詞後に来ることがわかる。^{注13} Cl-pro の移動を惹起する要因の一つはこの complementizer の que にあるのではなからうか。また (13b) の él, (13d) の usted は動詞後位をとる。不定詞及び命令文の主語は、もしそれらが表わされるならば、動詞後に立つ事実もこの que の有無と関連がありそうである。^{注14}

-r, -ndo の両 complementizer がどのような形で補文のどの位置に導入されるのか詳らかでないが、少なくとも動詞の後に付加された構造を示す段階があるはずである。例えば (13b) は次の中間派生構造をもつ。(13c, d) のタイプの命令文の場合でも補文を導く que が削除されると埋 (13b) Hacerlo él sería imposible.

(20) $s_1[s_2[\acute{e}l\ hace-r-lo]_{s_2}\textit{sería imposible}]_{s_1}$

め込み文の冒頭に主語の立つ構造が生ずる。(21)は文(13c.)の展開で complementizer *que* 削除による構造変化を略記したものである。*que* を含まない命令表現と不定詞がその主語の位置につ

(13c) *Espérale.*

(21) *que* 削除

a. $s_1[yo\ (\textit{imper})_{\text{注16}}\ s_2[que\ tú\ espera-le]_{s_2}]_{s_1}$

⇓

b. $s_1[yo\ (\textit{imper})\ s_2[tú\ espera-le]_{s_2}]_{s_1}$

いて同じように振舞うのは(21b), (20)に見られるような embedded S の冒頭に来る NP を後方へ並べ換える次の変形が作用するためだと思われる。この規則は(21b.), (20)をそれぞれ(23), (24)

(22) 主語後置

$X\ s_1[NP\ (no)\ V\ Y]_s\ Z \rightarrow 1, [\phi, 3, 4+2, 5]_6$
 $\begin{matrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \end{matrix}$

条件: 2, 3, 4, 5 は embedded S

(23) $s_1[yo\ (\textit{imper})\ s_2[espera-le\ tú]_{s_2}]_{s_1}$

(24) $s_1[s_2[hace-r-lo\ \acute{e}l]_{s_2}\textit{sería imposible}]_{s_1}$

に換える。ところで, (6)(9)(10)などの基底構造も抽象的な performative verb の目的節に埋め込まれていた筈であるが, (22)が適用される段階では既に主動詞と *que* を削除され, (25)等になっていると考える。つまり〔命令〕の意味素性を含む抽象的な performative verb (*imper*)

(25) $s[yo\ espero-le]_s$

とその主語の削除は主語後置 (22) よりも後に行なわれるのに対し, [−imperative] の一般的抽象動詞は同規則に先行して適用されると見ることができる。いずれにせよ, これらの変形は *que* 削除の後で起こる。*que* は削除されないケースも生じるが, Pro-verb 消去は義務的である。もっともその前に embedded S の動詞の“法”がこの matrix verb の性格や従節の主語の如何等によって決定されていなければならない。また〔命令〕の素性を持たない performative pro-verb は Equi-NP Deletion に先じて削除されている必要がある。

さて, 否定命令文 (16) はこの段階で (26) の派生構造を示す。(20)(23)(24) と (25)(26) の構

(26) $s_1[yo\ (\textit{imper})\ s_2[no\ haga-lo\ usted]_{s_2}]_{s_1}$
 注18

造上の違いは, 前者で動詞が (埋め込み) 文の先頭に現われている点である。従って S が動詞で始まらない時, Cl-pro を動詞の前位へ移動する規則が存在すると仮定できる。尚, (27) は主

(27) Cl-pro 移動

$X\ s[Y\ V\ pron\ W]_s\ Z \rightarrow 1, [2, 4+3, \phi, 5]_6$
 $\begin{matrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \end{matrix}$

(pron は一つ以上の [+N, +PRO] segment)

条件: $Y \neq 0$

語後置(22)の後に順序づけられれば 2, 3, 4, 5 が embedded S であるという条件は不要である。

IV) (27)の Cl-pro 移動規則には、しかしながら2つの難点がある。第一に(27)は(28)のような否定不定詞構文における Cl-pro の位置を正しく説明しない。S の冒頭にある ^{注19}no の存在は(27)

(28) a. Prometió no decirlo a nadie.

b. ¡ Ni pensarlo !

の適用を妨げないから、(28)の基底にある構造からは(29)が生じるであろう。もう一つ問題とな

(29) a. *Prometió no lo decir a nadie.

b. *¡ Ni lo pensar !

るのは(27)の背後にある一般的な現象である。何故このような変形が西語に見られるかということは主語後置規則と併せて検討すべきであろう。両規則からわかることは、embedded S の冒頭に名詞的要素が立つのを妨げようとする傾向である。(22)は左 S 境界直後の NP を後方へ持って行くので、この位置に NP を排除する働きがはっきりとしている。(27)では条件 $Y \neq 0$ で以って S の冒頭に Cl-pro を置けないことを間接的に示している。しかし動詞の前に主語か否定辞がある時、目的格代名詞が後から動詞前位へ移る理由を説明することができない。同時に、(27)と(22)が協力して動詞前位の名詞的要素の出現を忌避するのに貢献している事実を直観的にとらえるのは困難である。以上2つの欠陥は互に無関係でなく、原因は接語形代名詞の移動が後から前方へ行なわれると考えた点にありそうである。(30)における lo の位置の相違は何らかの形で

(30) a. ¡ Ni soñarlo !

b. ¡ Ni lo sueñes !

c. ¡ Ni lo sueñe usted !

(a)文での complementizer -r の存在に言及することなしには説明できないが、仮に Cl-pro 移動規則が代名詞を左から右へ置き換えるとすれば、(28) (30a)のタイプの否定不定詞文を導き出す方法が見出される。(28a)を例にとれば(31a)の派生構造を(31b)に変形する規則を想定すれ

(31) a. $s_1[\text{prometió } s_2[\text{no lo deci-r a nadie}] s_2] s_1$

b. $s_1[\text{prometió } s_2[\text{lo no deci-r a nadie}] s_2] s_1$

ばよい。そうすれば(31b)の lo は他へ代名詞と同様、動詞右へ移動する。これは一見 ad hoc な解決法に見えるが、この操作を理由づけることは不可能でない。即ち不定詞・現在分詞は否定辞 no と最も密接な結合力をもち、動詞の左の位置では no が接語形代名詞と動詞との連続の中へ割り込む。表面構造において否定辞 no は常に不定詞・現在分詞の直前に立つ事実はこの結果である。(27)とは反対方向への並べ換えが実現するとみなすためには、入力として Cl-pro が動詞の左側にある構造が必要である。そこで、先に仮定した目的格代名詞の複写が P のすぐ左にでなく動詞の左側に生成されるよう改めればよいのではないと思われる。

V) 以上の点を考慮して、III) でふれた諸規則と代名詞移動のプロセスを修正することにする。que 削除の結果生ずる構造(21b)は(32)に訂正され、これは(22)の S.D. に適合する故、(33)に

(32) $s_1[yo(imper) s_2[tú le-espera] s_2] s_1$

変形される。同時に、不定詞文(13b)は主語後置の適用後(34)を示す筈である。一方(6)(9)(10)な

(33) $s_1[yo(imper) s_2[le-espera tú] s_2] s_1$

(34) $s_1[s_2[lo-hace-r él] s_2 *sería imposible*] s_1$

どの単文に対しては(25)の代りに(35)を仮定する。否定辞を含んだ命令文の場合もこの段階で次の

(35) $s[yo le-espero] s$

派生構造をもつ。(28a)は既に否定辞移動変形を受けて(37)に変わっている。Cl-pro 後置規則は

(36) $s_1[yo(imper) s_2[no lo-haga usted] s_2] s_1$

(37) $s_1[*prometió* s_2[lo no deci-r a nadie] s_2] s_1$

(34)(33)(37)の lo, le を動詞後位へ移すが(35)(36)の le, lo はそのままにして置く。

つまり embedded S の冒頭に Cl-pro が来る時、それを動詞後へ並べ換える働きをすればよい。(27)は次のように修正されるだろう。(35)などの主語を削除する規則がもし上の規則よりも後に

(38) Cl-pro 移動

$$\begin{array}{ccccccc} X & s & (\text{pron}) & (no) & V & Y & s \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & \\ & & \text{pronは一つ以上の } [+N, +PRO] \text{ segment} \end{array} Z \rightarrow 1, [\phi, 3, 4+2, 5] 6$$

順序づけられておらず、両者が無順位で配列されているとすれば、(38)には2, 3, 4, 5は embedded S であるという条件が要求される。(35)(36)は Cl-pro 移動の構造記述に合わず、(38)は適用されない(6)(16)の如く代名詞は動詞に先行する。(33)(34)(37)はこの規則によって次の構造変化を蒙る。後に、(39)の yo, (imper), tú などを消去して、最終的に(13c)の表面構造へと導

(39) $s_1[yo(imper) s_2[espera-le tú] s_1] s_1$

(40) $s_1[s_2[hace-r-lo él] s_2 *sería imposible*] s_1$

(41) $s_1[*prometió* s_2[no deci-r-lo a nadie] s_2] s_1$

かれるだろう。

これまで派生の例として示した文の従属節は、主語後置や Cl-pro 移動が適用される段階で、S-node に支配されていることが明らかである。ところで(4a)の展開においては Equi-NP Dele-

(4a) Puedo hacerlo.

tion で従属節の主語が消えると S は V(VP?) のみを直接支配するため S-pruning Convention により S 節点が消去されることになる。(4a)(5a)などにおける Cl-pro は、上位文への上昇可能性を別にすれば、前節の各例文の場合と同等に規定されるべきである。そのためには、S-nodeは(4a)の場合においても Pruning を受けなくて残留する必要がある。しかし、この結果は Ross の Pruning の少なくとも一部を否定することになり、Rivero(1970)の考察とも矛盾する。また Perlmutter(1971: pp.113~4)の言うような complementizer that の削除が Pruning の原因になるという説をスペイン語の que に適用できないのは勿論である。これらの問題は更に追求されなければならないが、本稿は上記のケースでも S-node は失われず存在すると仮定する。ただ

Equi-NP Del を受けた従属節はそれを受けていない従属節と違った性格をもち、それが Cl-pro 上昇やその他の変形と係わっているのではないと思われる。

V) 次に(22)及び(38)の反例になるかも知れないと思われるいくつかのケースを検討してみよう。(42a), (43a) の variation とし (42b, c), (43b, c) の文が可能である。これらは願望文である

- (42) a. Que Dios te bendiga.
- b. Dios te bendiga.
- c. Te bendiga Dios.
- (43) a. Que Dios se lo pague.
- b. Dios se lo pague.
- c. Se lo pague Dios.

にもかかわらず que 削除が行なわれる点で特殊な事例である。しかし、命令文(13c,d)と異なり embedded S の冒頭に立つ筈の主語 Dios の後置がなされていない場合があり、後置されても Cl-pro は動詞に先行している。この種の構文は Dios, Jesús などを主語とする時にかなり多く

- (44) a. Dios les ayude.
- b. Dios nos asista.
- c. Jesús le ampare.

見られる。又 ojalá, así で導かれる願望文も que を欠くことがある。(42b)(43b)(44)のように

- (45) a. Ojalá que me acompañe.
- b. Ojalá me acompañe.
- (46) a. Así le parta un rayo.
- b. Así Dios me salve.

文頭に主語が立ち且つ接続法形の動詞に従える文が文法的であることを説明するのに2つの方法が考えられる。一つは主文の動詞が〔命令〕の意味特性をもたないので、V) で見たように、〔命令〕の Abstract-verb とその主語が削除されるより以前に動詞及び que を失い、S-pruning の後、既に複文でなくなっていると考えする方法である。別の考え方をすれば、主語後置(22)は願望動詞が直近上位の文に含まれる場合、適用されないで前述の各文が生ずるとみることでもある。しかし、(47)の各文は完全に受け入れられないのではなく、文語的 style としては認められる。^{注21}

- (47) a. ? Ayúdeles Dios.
- b. ? Bendígate Dios.
- c. ? Asístanos Dios.

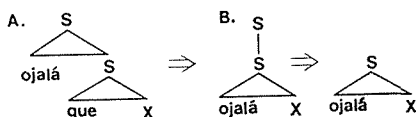
そうすると始めの解決策はうまく行かない。即ち、主語が後退することもあるわけで、願望文の一定範囲の主語に対して主語後置は義務的でなく任意に適用されると解釈すべきであろう。(42)～(46)において Cl-pro は動詞前位に留まっている。(42a, b)(43a, b)(44)(45a)(46b) の場合、代

(48) a. Ojalá que Vd. lo haga.
b. Ojalá que lo haga Vd.
c. Ojalá Vd. lo haga.
d. Ojalá lo haga Vd.
e. *Ojalá hágalo Vd.

(49) No creo que venga mi hermano.

ところで *ojalá* の後の *que* が消去されると embedded S の最初に NP の立つ構造になり、これに(22)が適用される筈で、主語が後退すると今度は Cl-pro 移動変形を受けて(48e)が生れてしまう。そこで(48e)の出現を妨げ、(48c, d)が文法的な文として生成されるようにしなければならない。これには、たとえ *que* が削除されて主語が文頭に立っても、主語移動(22)が *ojalá* を含む文に対して全く適用されず、(48d)は(b)から *que* 削除を経て生じるとみなせばよい。又(e)が生じないのは(b)を生み出す任意的主語移動規則が(38)よりも後で、比較的表層に近いところで行なわれるためだと考えられる。別の解釈も可能である。(22)(28)両規則の適用を受けるのは embedded S での最初に来る名詞的要素であった。(48d, c)の表面構造は単一の S に支配されているようにも見えるから、*ojalá* を最終的に下位の文に下げる変形が存在すると仮定する。もしこれが *que* 削除の後、(22)(38)の前に行なわれれば、S-pruning によってもはや後者の S.D. に合致しない構造になっている。*ojalá* の後の *que* が削除されると同時に *ojalá* を下位文頭に移す操作、つまり *que* が *ojalá* によって代置される過程、(49)A→B を仮定すれば、(48)a~d が

B



74

では未解決として置く。

VI) 主語後置規則 (22) と修正された Cl-pro 移動規則 (38) は構造記述・構造変化とも殆ど同じで、異なるのは前者で embedded S の先頭に立つ NP が動かされるのが、後者は同様の〔+N, +PRO〕を後置する点だけである。ここで、もし pron(Cl-pro) が NP の節点下に支配されているとみなせば、(38)の適用される時点で動詞の左にある〔+N, +PRO〕は NPに限られる。従って弱形代名詞目的格移動は次のように書き換えられ、条件 ii) を除けば(22)の主語後置と全く

(50) Cl-pro 移動

$$X_s[NP \text{ (no) } V \text{ } Y]_s Z \rightarrow 1, [\phi, 3, 4+2, 5] 6$$

1 2 3 4 5 6

条件 i): 2, 3, 4, 5 は embedded S

ii): 2 は一つ以上の NP を含み得る。

同一の規則となることがわかる。この条件は与格・対格の接語形代名詞が共起する構造を考慮したものであるが、(22)の適用後効果を発揮するもので、同一の規則が繰り返し 2 回適用されると解釈することもできる。不定形構文と命令文でその主語が動詞の後へ置かれるのも、Cl-pro がやはり動詞後位をとる現象も、共に埋め込み文の冒頭に NP を排除する制約が表層に近い派生の一段階まで存在するためだと考えられる。否定命令文で接語形代名詞が動詞に先行するのは pron の前に位置する否定辞の存在で、この制約に抵触しないからである。また否定不定形構文では否定辞と動詞の結びつきの強さのため、代名詞は動詞直前位を確保できず、それを no に明渡し、自ら embedded S の先頭に立つ結果、結局、動詞後位に来る。もし pron が NP 節点下になく、^{注22}他の構成素、例えば Clitic 又は動詞に直接支配されるとすると、主語後置規則と Cl-pro 移動規則が共に $X_s[NP V Y]_s Z$ なる構造の出現を阻止しているという協力関係を認めにくくなる。それ故、代名詞 P は動詞に接語化される際、その NP 節点と共に copy されると分析する根拠がある。すべての Cl-pro が派生の一段階で動詞の左側に位置するとみなすべきことを見て来た。そこで(12)の図式は(51)に修正されよう。

(51) a. V P

b. P'-V P 代名詞転写(義務的)

c. P'-V 代名詞削除 (条件(11))

IV節の終りに指摘したことに関連するが、もし Ross の S-pruning が正しければ(22), (38)の両規則は通常の変形とみなすことはできない。何故ならば主語後置・Cl-pro 後置は共に派生の前段階での embedded S の存在に言及する必要があるからである。その場合、両者は G.Lakoff (1970)の主張するような一つの global derivational constraint として捉える alternative も考えられる。どちらの見解をとるべきかは、Cl-pro の枠内で解決できそうな問題ではなく、更に広範囲の現象を調べる中で検討を加えられるべきだろう。

接語化規則が正確にどのような姿をとるのかは未だ十分明らかでない。(51b) P' が動詞に対

して sister adjoin されると見るべきか、あるいは V node に Chomsky 付加されるとみなすべきかについて、筆者は (1972a) で前者により、(1972b) では後者による定式化を試み、本稿も暫定的にこれを受けついでいるが、更に検討の余地がある。 (51) の接語配置に際して P が一個の代名詞要素のみを指すのか、2 乃至 3 個の目的格代名詞を含み得るのかも問題である。即ち、代名詞転写が一回に一代名詞に対して行なわれ、同一規則が自らの出力に繰り返し適用されると考えた方がよいのか、与格・対格等の 2 つ (以上) の代名詞群が同時に接語化されると見るべきかについても議論されなければならないだろう。

VII) まとめ

弱形目的格人称代名詞の前置・後置は動詞の形態的特徴によってではなく、派生構造中に占める位置により決定される。もしそれが埋め込まれた文の第一要素であれば動詞後へ移動させられる。この変形は目的格代名詞が何故、肯定命令文、不定詞、現在分詞と共に起るとき、動詞後位をとるか一度に説明する。命令文・不定詞構文において主語を後置する変形もこれに関連しており、派生の一定段階まで埋め込み文の冒頭に名詞句を忌避する制約が存在することを示唆している。

(1973. 8. 20)

[注]

1. p. 79 Note 52:

It is assumed that there are at least two rules of clitic placement in Spanish—one that moves clitics to the verb in their S, and a later rule which, under certain conditions, moves the clitics to the verb of a higher S

2. Ross (1967: p. 26)

3. haber+過去分詞から成る動詞複合時制は考慮に入れない。

4. この考え方の萌芽は Langacker (1968) に見られる。Stockwell-Bowen-Martin (1965) の書評であるという関係で、彼の Clitic 移動規則は限られた範囲のデータのみを説明する簡単なものである。Langacker は次の文を比較し、Cl-pro は動詞が 井(左文境界)の直後にない場合にのみ動詞前位に移動せられるのに

El los tiene.

Usted se lo pide a él.

Pídaselo a él.

No se lo pida a él.

注目する (p. 218)。しかし不定詞・現在分詞構文における接語形代名詞の位置と命令文との関係には触れていない。

5. 代名詞配置はわりあい表層に近い所で行なわれるプロセスと考えられるので、例えば (6) の深層構造がどのようなものであるかに関する議論には立ち入らない。また基底構造と述べる時にもそれが代名詞のシンタクシスを扱う上で必要な最底限の深さの構造という意味で用いる。小論では派生構造の標記に代名詞形を le, lo etc. と略記するが、これらは必ずしもそのような音形を備えた単位を意図しているのではなく、feature complex の代りであることもある (p. ej. (7))。

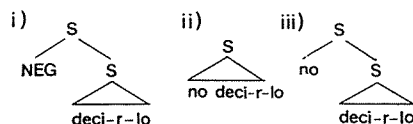
6. 現在分詞形に対しても clitic form は a. b. と同様、動詞に後置され不定詞と同じ扱いを受けるが、説明を簡単にするためここでは省略する。

7. Katz & Postal (1964: p. 149 Note 9), Ross (1970: p. 223)。

8. Stockwell et al. (1965) では接続法を要求する *usted, ustedes* に対する命令文を動詞 *querer* の目的節から派生させる分析を示唆するものの、全般的には対応の直説法平叙単文から命令文を導く立場がとられている (pp. 230-233)。Lozano(1972)は、命令文は *mandar, pedir* の接続法構文から派生したと見る。
9. R. Lakoff(1968) はラテン語の接続法を説明する上で (*imper*)(*vel*)(*vol*)などいくつかの Abstract-verb を設定する (pp. 161-172)。
10. (18b)のような命令形は不定詞と認めず二人称複数命令法 *venid* の異形態とする見方が広く行なわれているが、もし i) の *levantar* が *levantad* の形態的 variant であるだけなら iv) が非文で ii) が可能な事
 - i) *Levantaros.*
 - ii) *No levantaros.*
 - iii) *Levantaos. (<Levantad+os)*
 - iv) **No levantaos*
 実の説明がつかない。*levantar* が不定詞形であればこそ、肯定・否定動詞に関係なく *os* が i). ii) のような位置を占め得ると考えられる。*-r* 語尾の命令的用法が周延的であれ二人称複数以外にも見られる事実も形態論的解釈の困難なことを示す。
11. (間接) 命令文・願望文に限らず一般の declarative sentences もより深い構造で上位の動詞に埋め込まれているとみられる証拠があり、この場合も *que* と動詞の削除は別に行なわれる筈である。Cf. Ross (1970: p. 259 注46)。

Que no estaba en casa.
No estaba en casa.
12. Katz & Postal (1964: p. 76) で提案されている imperative morpheme の I にあたる。
13. *Tengo que esperarle. Hay que esperarle.* のように *que* の後に不定詞を従える文が見られるが、これらに於ける *que* は complementizer ではなく、別個に考えられなければならない。
14. 命令文の主語が動詞に先行する ii) の語順は i) に比べて強意性・対比性が強く有標な (marked) 語順で
 - i) *Siéntate (tú).*
 - ii) *Tú siéntate.*
 ある。ii) は i) から *tú* の topicalization によって得られると見る。
15. (12)で P に相当する目的格代名詞は未だ削除されず (12b) の段階を示すと考えられるが、Cl-pro の移動とは関係がないので以下の派生構造の表記から省く。イタリック体は当面の問題に直接関連がないため構造表示をしていない部分である。
16. (*imper*) は命令文の基底にあると考えられる「抽象動詞」を示す。
17. 規則の extrinsic ordering によって、これらのプロセスの適用範囲を限定する方法が最上であると必ずしも信じるわけではない。次のような alternative も考えられる。例えば (*imper*)の削除は embedded S の冒頭に NP がいないことを条件に遂行されるが、他の performative PRO-verb にはそのような条件は不要と述べれば、両者の順序づけは問題外となる。更に [-imperative] の performative verb と Equi-NP Deletion の関係も、後者は Matrix verb が抽象動詞の時適用されないと条件づければ解決できるであろう。
18. 表層で *nunca, ni* が文頭に来る文も一定の派生段階まで動詞前に *no* をもつと見られる。Hadlich (1971: pp. 114-115) によると、*no* が消去されるのは *neg* を組み込んだ語が Topicalization を受け動詞より前方に置かれた後である。この Topicalization は Pro-verb とその主語が削除され S-pruning を経て単文化した後、行なわれると考えられるから、Cl-pro の移動に直接の影響を与えない。
19. 現在分詞についても同様。注 6 参照。
20. 更に深い構造で否定要素は、否定される文の直近上位文に起源をもち、i) の状態を示すと思われる [Cf. Rivero (1969: pp. 50-52), Ibáñez (1972: pp. 50-51 & p. 98)。もし *no* が i) 又は iii) の位置に留ま

ると仮定すると、(28)の派生には好都合だが今度は(16)が導出できない。どちらをも満足させるには、noの引き下げが complementizer の種類によって別々に異なる時期に行なわれるとしなければならないがこれは不自然である。尙(28b)のniについては注18参照。



21. Bello (1958 : p. 287)によれば、肯定願望の接続法形動詞が来ると Cl-pro は enclítico で、afijo (i. e. 動詞に先行)を許さないという。(47)の各文が奇妙なのは(42)や(43)の表現の成句的性格に原因があるの
 a) Favorézcale la fortuna.
 b) *Le favorezca la fortuna.
 かも知れない。
22. Perlmutter (1971 : pp. 78-80)は、clitic を上位動詞へ移動する規則は NPs(とその位置)に言及するのではなく clitic であるという事実に関わるから NP の node の存在根拠はない、と主張する。

REFERENCIAS

- Bello, Andrés y Rufino J. Cuervo (1958) Gramática de la lengua castellana. Buenos Aires
- Hadlich, Roger (1971) A transformational grammar of Spanish. Englewood Cliffs, N. J.
- Ibáñez, Roberto (1972) Negation im Spanischen. München
- Katz, Jerrold J. and M. Postal (1964) An integrated theory of linguistic description. Cambridge, Mass.
- Lakoff, George (1970) Global rules, *Language* 46, pp. 627-639
- Lakoff, Robin T. (1968) Abstract syntax and Latin complementation. Cambridge, Mass.
- Langacker, Ronald W. (1968) Review of Robert P. Stockwell, J. Donald Bowen and John W. Martin : The grammatical structures of English and Spanish (1965), *Foundations of Language* 4, Pp. 211-218
- Lozano, Anthony G. (1972) Subjunctives, transformations and features in Spanish, *Hispania* 55, Pp. 76-90
- Perlmutter, David M. (1971) Deep and surface structure constraints in syntax, New York
- Postal, P. M. (1966) On so-called pronouns in English., R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum(eds.): Readings in English transformational grammar, Pp. 56-82
- Rivero, María-Luisa (1969) The Spanish quantifiers. Ph. D. Dissertation, University of Rochester.
- (1970) A surface structure constraint on negation in Spanish. *Language* 46, Pp. 640-666
- (1971) Una restricción de la estructura superficial sobre la negación en español. Heles Contreras (ed.) : Los fundamentos de la gramática transformacional, Pp. 91-134
- Ross, John Robert (1967) Constraints on variables in syntax. Ph. D Dissertation, M. I. T., Reproduced by the Indiana University Linguistic Club
- (1970) On declarative sentences. R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum(eds.); Readings in English transformational grammar, Pp. 222-272
- Stockwell, Robert P., J. Donald Bowen and John W. Martin (1965) The grammatical structures of English and Spanish. Chicago.

出口厚実 (1972a) スペイン語人称目的格と代名詞化, 大阪外大学報第26号, Pp. 1-18

— (1972b) 人称代名詞配置・移動に関する考察, 第18回日本イスペイン語学会発表 於駒沢大学

— (1973) スペイン語に主語代名詞削除は存在するか, 大阪外大学報第29号, Pp. 3-12

追記

小論を脱稿後, 本稿のテーマである西語 clitics に関連して米国で数編の論文が発表されている。また, Spruning に関しては, Postal: On Raising (1974) が Rivero (1970) に代わる興味深い対案を示しているのを知った。これらの新しい文献や筆者自身のその後の考え方の発展をふまえ, 何ヶ所か加筆すべきと思われるところが生じたが, これらの再検討は稿を改めることとし, 一まず (1972年口頭発表に近い) そのままの形で発表することにした。

(1974. 7. 31)